

同窓会会報

高知県立大学看護学部

第23号

令和3年10月25日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



ごあいさつ

同窓会会長 梶原和歌



同窓会の皆様におかれましては、平成23年度から今日までの長きに渡りご協力を戴き感謝でいっぱいでございます。昨年春に左アテローム血栓性脳梗塞となり、7日の入院ですっかり良くなりました。が、今年の春までに数回の短期入院を経験し現在は通院で感覚性失語の訓練を受けております。

令和3年、第1回役員会において同窓会会長として中山洋子様を推薦し、総会で決定する運びとなりました。本当におめでとうございます。この同窓会会報第8号と19号で中山先生ご自身が語っておられましたので、一言添えてお喜びを申し上げます。文部科学省「平成24年度博士課程教育リーディングプログラム・災害看護グローバルリーダー養成プログラム」の高知県立大学院責任大学院として、5大学を調整していく作業でした。東日本大震災を福島県立医科大学看護学部在職中に経験され、その重荷を背負って平成25年4月からこの事業に取り組みられました。本大学院にとってはこの上ない特任教授であり、6年を要して平成31年3月に4名の修士が誕生となりました。南前学長、野嶋学長らを助け、本学が困っていたとき応援下さった先生でした。16期生の同窓会の場で50年経ってもクラスメートは変わらない。母校は母港だと感じ、人生の旅の中でまた寄りたいたいと述べられておりました。その時が丁度来たのです。

さて、今、コロナ感染症から医療提供体制や病床不足が言われていますが、戦争末期、昭和19年12月に高知県立女子医学専門学校がつくられた礎は多くの変遷、示唆を含んで今日まで続いてきました。看護学部の生まれた昭和27年私達は自由でのびのびと勉強もせず、サークル活動その他に打ち込んできました。創始者の和井兼尾先生や先生方から「実習は厳しいが看護の開拓者として看護学の発展に貢献しよう！」と学び、「高知女子大学看護学会」に参加する喜びも学びました。卒業しても新しい知識に触れ、卒業生・修士生の国内外のリーダーとして活躍される力を感じてやってきました。平成22年、この同窓会準備委員会の庶務をさせていただき、先生方がいかに学生一人ひとりを大切にされているか身に染みて感じます。多くの先輩の姿をものともせず新しい時代を生きて下さい。齢80歳になって、できればもっと勉強をすればよかった。自分の仕事に疑問を感じた時、大学院の道を叩けばよかったと感じています。令和3年2,205名となり、今後も私達は母校の発展をお祈りしています。

主な内容

- ①同窓会会長ごあいさつ
- ②同窓会新会長ごあいさつ
- ③ようこそ先輩！
- ④令和3年度同窓会総会報告
- ⑤第47回高知女子大学看護学会の報告
- ⑥看護開発研究会
- ⑦活躍する卒業生
- ⑧看護学部は今



新会長 ごあいさつ 中山 洋子(16期生)



この度、高知県立大学看護学部同窓会の会長を引き受けさせていただくことになりました中山洋子です。看護学部同窓会は、2010年4月に高知県立大学池キャンパスに本部新校舎が完成した年に設立されています。初代会長は南裕子先生です。翌年に大学は、高知女子大学から高知県立大学になり、南先生が学長に就任されましたので、梶原和歌先生が同窓会会長を引き継いでくださいました。そこから10年間、梶原会長のもとで同窓会は今日のような発展を遂げてきました。梶原先生が会長を退任されるとお聞きしたときに、バトンが私のところに届きましたが、同窓会にこれまで何も貢献してこなかった私に同窓会会長のお話がかかるとは予想もしていませんでした。東日本大震災を福島県で経験した後、2013年4月に、高知県立大学大学院看護学研究科共同災害看護学専攻(DNGL)の特任教授として着任いたしました。DNGLで6年間、信頼できる人々との温もりある関係の中で仕事ができたと、高知での生活の中で恩師や同級生との交流ができたことが、私の母校への思いを変え、同窓会の大切さを身をもって知ることができました。

同窓会副会長の中野綾美先生が第19号の会報で「同窓生のネットワークは、長年にわたって皆で作上げた財産です」と書いています。梶原先生から渡された会長のバトンをしっかりと持って、人と人とのつながりの財産を守りながら、同窓生の皆様と一緒にポストコロナ社会を走っていきたく思います。コロナ禍で梶原先生に直接、感謝の気持ちをお伝えすることができないのは残念ですが、お会いできる機会を楽しみにしながら、まずは「ありがとうございました」とともに「お疲れ様でした」と申し上げたいと思います。

2020年春頃から流行しはじめた新型コロナウイルス感染症のことは、一時たりとも私たちの頭から離れたことはありません。そして、新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、私たちの生活様式を変えました。家から外に出るときは、マスクを着け、social distanceを保って歩き、帰ってくれば手洗いをすることが習慣化しました。私はいくつかの大学で少しだけ仕事を続けているのですが、授業も、会議も、学会もそのほとんどがオンラインになりました。時間があっても旅行にも外食にも、そして映画館や美術館にも行かず、ひたすらstay homeの日々で、コンピュータの前に座っている時間だけが増えました。知らず知らずのうちにICTが私たちの日常の中に当たり前のように入り込んできていることに驚かされたりしています。

こうして考えていくと、同窓会のあり方も変わっていくのだろうと思います。同窓会の集まり・総会も参加人数には限りがあると思いますが、オンラインで開催することができます。それによって、これまで高知まで行くことができないからと参加を見送った方が参加できるようになり、反対に、オンラインは使うことができずに、参加できない方も出てきます。縦系と横系が織りなすように人と人が出会い、再会し、たくさんの感動やドラマを生んできた同窓会、その歴史を大切にしながらも、私たちはポストコロナ社会を見据えた人とのつながり方や同窓会のあり方を考えていく必要があるように思います。また、ポストコロナ社会において、人と人とのかわりを大切にする私たち看護専門職はどのような力を発揮し、どのような役割を担っていくことができるのかについても考えていく必要があります。東日本大震災のなかで私が学んだことは、「危機は変革の時」ということです。私たち看護専門職は、ポストコロナ社会において何をどのように変えていくことができるのか、皆様とともに新たな挑戦をしていきたいと思っています。



写真: 仁淀川
「仁淀ブルー」と呼ばれる水の
色で、日本でも有数の水質が
きれいな河川として有名です。

高知県立大学今昔フォトライブラリ

「母校を訪れてみたい」と、同窓生の方からお声をいただきました。
写真で高知県立大学の昔を懐かしんだり、今の様子を見ていただければと思います。

1950年代
旧南舎



1980年代
学生会館と南舎



1980年代
永国寺キャンパス正門



1980年代 永国寺
体育館とテニスコート



1990年～2000年代
池キャンパス正門



2020年
池キャンパス正門



ようこそ先輩！

光陰矢の如し！

小寺 栄子先生(23期生)
西武文理大学看護学部教授



高知女子大学衛生看護学科を卒業してなんと44年も経ってしまった！学生そして教員として勤務した高知での思い出は今もつい最近のことの様に思い出される。卒業後は神奈川県内の大学病院で臨床実践の後、大学院で学び、その後も元の職場に戻り、院内教育や看護管理に携わった。そして25年前に、卒業時には二度と高知の地を踏むことはないと思っていた地に再び教員として戻ることになった。結局、高知には、家庭の事情で東京に戻るまでの6年間在職した。この間、高知女子大学の変革の始まりの時期に当たり、家政学部看護学科から看護学部としての独立、学部カリキュラムの改正、看護学研究科修士課程の設置、池キャンパスへの移転、入学定員数の20名から40名への増員、健康生活科学研究科の設置など、めまぐるしい日々の中でも看護学高等教育機関としての基盤と体制づくりに没頭して取り組んだ6年間であった。その後も静岡県立大学、そして現大学に勤務し、それぞれの職場で看護学教育機関としての基盤と体制づくりに未熟ながらも取り組んできたが、私の教員としての基本的な姿勢と考え方は、高知女子大学でのこの6年間の間に培われたものであることは確かである。

私が退職した後も、高知女子大学はさらに高知県立大学として発展を続け、今日に至っている。もう一つ私が母校に感謝すべきことは、退職後21年間、辞退しても飽きもせず、毎年、送られてくる看護学研究科の非常勤講師の依頼である。渋々お引き受けし、必然的に毎年、集中講義ではあるが高知に帰り、教育の一端を担わせていただきながら、看護学部・看護学研究科の変化と発展を目の当たりにし、またアクティブに活動を続ける先生方や学生さんの姿に勇気づけられる中で、看護教育のあるべき方向性を学ばせていただいたことである。

あっという間の40数年の職業生活を振り返ってみると、実践者、研究者、教育者としてはいずれも中途半端なままで、その点では大いに悔いは残るが、看護学教育の大きな転換期に四苦八苦しながらも自分なりに役割を担えたことに感謝し、またここまで常に見守り、導いて下さいました恩師の先生方に心より篤く御礼申し上げます。高知県立大学が看護学教育のパイオニアとして歴史を重ね、今後益々発展されることを心より願っています。

高知女子大学での学びと教員生活



岸田 佐智先生(25期生)
徳島大学医歯薬学研究部 女性の健康支援看護学分野

定年退職を今年度末に控え、高知県立大学同窓会の会報への原稿を依頼されました。これも何かのご縁かなと考えています。お声をかけていただきありがとうございます。

高知女子大学家政学部衛生看護学科(以後“女子大”)25期生として卒業し、すぐに助産師になりたく京都に行きました。当時、女子大の看護教育25年間で、卒業後ストレートで助産師学校に行った学生はいなかったと聞いています。私は、非常に単純な人間で、母性看護実習の1日目に、出産に立ち会わせていただくチャンスがありました。この出産場面が、人の誕生の神秘性、母親と児の共同作業、それに対する看護者の支援の重要性に、助産師へと突き動かしたと言えます。

その後、助産師として臨床経験をし、修士課程に進んだとき、母校である女子大の母性看護学を担当する教員へと誘われ、看護の教員生活が始まりました。女子大では、昭和62年から平成14年迄の15年間を、母性看護学を中心に担当してきました。ほとんど生粋の女子大卒の仲間とともに教員生活が始まり、看護観については、特に違和感もなく教育できたことは幸いだったと思います。先生方の中には海外でさらに学んだ方も多く、新たな刺激も受けました。日本初の看護の大学教育を始めたとはいえ、専任教員は5名から始まり、私が在籍した時も9名ほどだったと思います。しかし、女子大の改組問題は常にあり、そして時は少子高齢化社会の問題が喫緊の需要課題とあり、高知工科大学の設置などの影響も受け、女子大も改組に向かいました。その結果、悲願の家政学部看護学科から、看護学部として独立をすることが平成10年に実現しました。これは、看護学が独立した学問として認められたことだと思っています。改組時はカリキュラムの構築やキャンパス移転、施設の設計等、多くの検討事項があり事務の方と共同作業で日夜議論を重ね作り上げていきました。その後修士課程、博士課程の設置と看護学教育の確立ができました。

回顧録になりましたが、このコロナ禍、乗り越えるためには医学モデルだけでなく、生活基盤を大事にする看護モデルこそが求められています。看護の視点を持って、免疫力の向上と感染予防行動の発信が重要でしょう。在学生や卒業生皆さん、昨年よりいっそう閉塞感が強くなっているように思いますが、自由な気風が生まれた高知から乗り越えて行きましょう。

ようこそ先輩！



岡本 真知子さん(22期生)

私が高知女子大学を卒業してから45年になります。卒業してからは臨床や教育の場で働いて現在は非常勤講師で精神看護学の講義をしたり、臨床現場の方々に管理について講義をしたりしております。学生時代からもうこんなに歳月が流れたのかと驚くばかりですが、学生時代の体験は鮮明にというか、むしろ新たな学びを、今も私に与え続けてくれています。

それは基礎実習の初日のことでした。私は白いストッキングを忘れてしまい、どうしてよいか分からず、泣きそうになってエレベータの前で立っていました。すると、山崎近衛先生が「どうしたの」と声をかけてくださいました。事情を話すと「まあ、それで困っていたのね。可哀想に。」とおっしゃって、ストッキングを貸してくださいました。その時の山崎先生の優しいお声や雰囲気は今も忘れることが出来ません。初めての実習の、しかも初日。大げさでなく「この世の終わり」くらいに思っていた私の気持ちを、先生はふわっと救いあげてくださったのです。その時、私は「看護する人はこんなことが出来るんだ。私もこんな人になりたい。」と思ったものです。そして今、ケアリングや人材育成について講義をするときには、いつもあのときの体験「ふわっと救われた感覚」もともに伝わるよう心がけています。

また、人材育成の講義では、私はアドラーの「勇気づけ」を基盤にしています。勇気づけとは、困難を克服する活力を与えるものと言われています。思えば、学生の頃から、先生方にはたくさんの「勇気づけ」をいただきました。なかでも南裕子先生はご自分でも私は学生の良いところを見つけるのが得意なのとおっしゃるように、いつも「〇〇出来ているわね。」とってくださいました。でも、私には「あなたは看護師に言えないことが言えるわよ。」とおっしゃっていましたが、あれは褒め言葉だったのかどうか今でも分かりません。看護師育成の際には、「勇気くじき(減点主義や失敗のみの追求、時には人格否定など)」があったということをよく聞きますが、幸いにも、私たちは「勇気づけ」で育てていただきました。失敗ばかりで時々変わった発言をする私たち22期生は先生方の勇気づけがなかったら看護師になっていなかったかもしれません。

今後私も、健康が続く限り、後輩の皆さんに先生方からいただいた貴重な体験を伝えていきたいと思っています。

松村 昭子さん(35期生)
ドクターズオフィス勤務



ホノルルの日系の内科医の下で、プライマリーケアのスタッフとして、平均年齢63歳の外来診療に携わっています。毎年1度の身体検査、各種の癌予防や骨密度測定の検査予約、急性、慢性疾患のケアが主な業務内容です。ハワイ州は、アジア人、白人、混血人が多数を占め、ハワイアンとポリネシアンは、わずか10%にすぎません。今回のパンデミックでは、少数派であるハワイアンとポリネシアンの間でワクチンの接種率が低く、その人種が多い西側の地域に集中的にコロナ陽性者が出ています。また、フィリピン人、ハワイアンとポリネシアンは、ハワイ州の人口の20%を占めますが、コロナ死亡率では44%を占めています。これらの人種間では、糖尿病の有病率が最も高いことや、1世帯の人数が多いこと、親族が常に集まる機会が多いなどの特徴が挙げられます。

パンデミック以前から、ハワイ州は、高齢化社会と健康保険料や医療費の高さに加え、土地や生活費の高騰、浮浪者の増加、医師の経営破綻と慢性的な医者不足を経験しています。国民保険がないため、退職後に健康保険を継続してもらえない一部の公務員を除いては、老人保険に加入できる65歳まで、健康保険のために働くのが通常です。食生活の面では、若い世代を中心に健康的なライフスタイルや無農薬野菜、地球温暖化への配慮による植物性食品中心の食生活に強い関心が寄せられる一方で、人種間や、家庭による格差が見られ、共働きが多数派のため、毎日夕食は外食で済ますという家庭も少なくありません。

職場で交流する患者さまは、大多数がアジア系アメリカ人で、プランテーション時代に日系の移民として苦勞された方のお話を伺い深い感銘を受けたり、80歳近い白人の方が、若者と一緒にクロスフィットを楽しむ姿に触発されたりと、人生の先輩方から学ぶ機会が多々あります。仕事を通して、私も微力ながら、コミュニティにお返しできればと願っております。コロナ禍の中、職場や日常生活の中で、大変なご苦勞をなさっていると察します。くれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。

令和3年度 同窓会総会報告

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染拡大防止と会員皆様の健康と安全面への配慮から、令和3年度と同窓会総会の対面での開催を中止し、文書(議決書)送付による総会とし、議案賛否のお返事をいただく形としました。その結果のご報告を致します。下記の3点の審議事項につきまして、賛成多数にて、承認いただきました。審議などへのご協力、誠にありがとうございました。

議事次第

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1) 報告事項 | 2) 審議事項 |
| (1) 令和2年度活動報告 | (1) 令和3年度活動計画案 |
| (2) 令和2年度決算報告 | (2) 令和3年度予算案 |
| (3) 令和2年度会計監査報告 | (3) 令和3年度同窓会役員について |

令和3年度活動計画

1. 会議
 - 1) 総会の開催
 - 2) 役員会の開催
2. 事業および活動
 - 1) 講演会の開催(高知女子大学看護学会と共催)
 - 2) 懇親会 ⇒開催中止
 - 3) 会報発行
 - 4) 高知女子大学看護学会への活動支援
 - 5) 学生及び同窓生活動への支援
 - 6) 給付型特別奨学金の給付
 - 7) 緊急奨学金貸与
 - 8) ネットワーク強化

令和2年度事業報告

1. 会議
 - 1) 総会の開催
 - 2) 役員会の開催
2. 事業および活動
 - 1) 講演会の開催(高知女子大学看護学会との共催)
 - 2) 懇親会 中止
 - 3) 会報発行
 - 4) 学生支援、同窓生活動支援
 - 5) 高知女子大学看護学会への活動支援
 - 6) 緊急奨学金

*1:看護学部長
*2:看護学会名簿管理係兼

同窓会役員名簿(令和3年度)

役員名	氏名	卒業・修了期	所属
会長	中山洋子	16期生	文京学院大学大学院 特任教授
副会長	藤田佐和* ¹	28期生	高知県立大学看護学部
	中野綾美	27期生	高知県立大学看護学部
書記	田鍋雅子	38期生・修士13期生・博士18期生	高知医療センター看護局
	山中福子	修士7期生	高知県立大学看護学部
会計	川上理子	35期生・博士9期生	高知県立大学看護学部
	西内舞里	46期生・修士12期生	高知県立大学看護学部
会計監査	野田真由美	34期生	高知市保健所
	矢野智恵	38期生・修士1期生・博士17期生	高知学園短期大学
庶務	角谷広子	25期生・修士5期生	芸西病院看護部
	池添志乃	34期生・修士2期生・博士1期生	高知県立大学看護学部
	川本美香* ²	修士13期生・博士18期生	高知県立大学看護学部

令和2年度 会計報告

令和3年度 予算

令和2年度 高知県立大学看護学部同窓会決算報告 (令和2年4月1日～令和3年3月31日)

収入の部	費目	予算額	決算額	差引	備考
	前年度繰り越し	13,235,928	13,235,928	0	
	令和2年度会費	1,575,000	1,560,000	△15,000	新年度学生86名のうち86名(100.0%) 新年度大学院生(前期14名、後期8名)のうち12名納入(60.0%) 前年度まで未納入の学部生・大学院生:6名
	寄付金	200,000	245,000	45,000	延べ26名
	奨学金返済	270,000	285,800	15,800	
	利息	60	61	1	
	合計	15,280,988	15,326,789	45,801	

支出の部	費目	予算額	決算額	差引	備考
	会議費	30,000	11,415	18,585	役員会等
	同窓会会報発行費	440,000	440,000	0	会報発行2回
	高知女子大学看護学会支援費	300,000	300,000	0	高知女子大学看護学会への活動支援費
事業費	同窓会総会・懇親会運営費	0	0	0	会場費、懇親会運営支援費など
	学生および同窓生活動支援費	400,000	50,000	350,000	1件10万円以内 ①第25回日本在宅ケア学会抄録集広告掲載料:¥50,000
	緊急奨学金費	535,800	0	535,800	
	給付型特別奨学金費	3,000,000	500,000	2,500,000	令和2年度のみ予算 1件あたり10万円 2回生4名、3回生1名に給付
	小計	4,705,800	1,301,415	3,404,385	
事務費	役員費	370,000	357,786	12,214	郵送料、切手、はがき代、ホームページ管理費等
	印刷費	200,000	100,058	99,942	封筒印刷、会議録取り等
	消耗品費	100,000	20,543	79,457	ファイルほか事務用品、A4用紙、宛名シール等
	報償費	240,000	38,000	202,000	名簿管理、証書整理、書類発送に関するアルバイト料等
	小計	910,000	516,387	393,613	
	予備費	9,665,188	0	9,665,188	
	合計	15,280,988	1,817,802	13,463,186	

令和3年度への繰り越し金=収入の決算額 15,326,789円 - 支出の決算額 1,817,802円 = 13,508,987円

監査報告書
高知県立大学看護学部同窓会会長 様

監査期間 令和2年4月1日～令和3年3月31日

監査結果 証換書類並びに諸帳簿を資料として監査を実施した結果、正確かつ適正に処理されていることを認めます。

令和3年6月22日 会計監査 矢野 智恵



令和3年6月20日 会計監査 野田 真由美



令和3年度 高知県立大学看護学部同窓会予算案 (令和3年4月1日～令和4年3月31日)

収入の部	費目	予算額	備考
	前年度繰り越し	13,508,987	令和2年度在学生(学部、大学院)の終身会費を含む
	令和3年度会費	1,575,000	15,000円×105名=1,575,000円 学部生:82名 大学院生:23名(博士前期課程20名、博士後期課程3名)
	寄付金	200,000	1口1,000円×200口
	奨学金返済	250,000	令和元年度貸与会員返済残金
	利息	60	
	収入合計	15,534,047	

支出の部	費目	予算額	備考
	会議費	30,000	役員会等
事業費	同窓会会報発行費	440,000	会報発行2回
	高知女子大学看護学会支援費	300,000	高知女子大学看護学会への活動支援費
	同窓会総会・懇親会運営費	0	令和3年度同窓会総会・懇親会運営方法の変更
	学生および同窓生活動支援費	600,000	1件あたり上限20万円
	緊急奨学金費	535,800	
	給付型特別奨学金費	3,000,000	令和3年度のみ予算 1件あたり10万円
事務費	役員費	370,000	郵送料、切手、はがき代、ホームページ管理費等
	印刷費	200,000	封筒印刷等
	消耗品費	250,000	事務用品、小型カメラ、A4用紙、宛名シール等
	報償費	200,000	名簿管理、書類発送に関するアルバイト料等
	予備費	9,608,247	
	支出合計	15,534,047	

会計に関わる審議事項についてのご報告

令和2年度会計報告・監査報告については、「収入の部」備考欄の寄付者延べ人数について指摘があり修正しました。金額の修正はなく承認されました。

令和3年度予算案については「収入の部」費目において令和3年度会費となるべき箇所が令和元年度になっているとの指摘があり、誤植を修正しました。その他の意見はなく予算案は承認されました。

第47回 高知女子大学 看護学会の報告

令和3年7月17日に『人生百年時代の看護のSHIFT(シフト)』をテーマに、第47回高知女子大学看護学会がWebにて開催されました。

卒業生・修了生をはじめ県内外の医療福祉の関係者191名のみなさまに参加登録いただき、活気ある学術集会となりました。

講演

熊田孝恒先生



パネリストの先生方



京都大学大学院 情報学研究科 知能情報学専攻 心理情報学分野教授、熊田孝恒先生を講師に「人の心とAI」というタイトルでご講演いただきました。

講演では、AIの技術の現状が説明された後、その延長線上で、人間の心を模した、あるいは、人間の心を理解するAIが可能なのか、人間の心の性質という面から考えるための興味深い研究結果などが示されました。講演を通して、AIには得意なことで、苦手なことがあるという説明に納得し、人が生活の中で解いている問題には、AIが得意な正解のある問題よりも、むしろAIの苦手な正解のない問題の方が多いという説明に自分たちの生活を振り返り、われわれは正解のない問題の正解をAIに求めていたのかもしれない…と考えてしまいました。それぞれの立場でさまざまなことを考えさせられる講義だったように感じています。

講演に対するアンケートにも、「あたり前にやっている判断について考え直す機会をいただきました。」「学生の教育だけでなく、臨床場面においても、システムが“予測”する場面が多くなってきました。裏を返せば、システムの予測したことを人間がどう活かすのかが問われているのであり、そもそも人間はより深い知見を持つことが求められているのだと思います。AIと共存しながら看護実践を組み立てていくことについて、今一度考えてみたいと思います。」「心や感情への対応は困難なことが多いと感じていたが、それこそAIでは対応が難しいところであり、人間らしい部分であることがわかった。大変ではあるが、“人間だからこそできる”というポジティブな気持ちを持ちつつ対応していけるといいなと考えた。」など、参加者からはAIが補完するケアの在り方や人にしかできないケアの独自性について感想が寄せられました。

特別企画・ワークショップ

特別企画 コロナ禍におけるこころのケア 話題提供者・コーディネーター



午後からは特別企画「コロナ禍におけるこころのケア」と、人生百年時代への挑戦in高知をテーマに企画した4つのワークショップを開催しました。Webで行った、はじめてのワークショップでしたが、参加者同士の豊かな意見交換が行われ、「県内外における支援の現状や課題を知ることができた」「具体的な対応、取り組みを知ることができてよかった」などのご感想をいただいております。

特別企画:コロナ禍におけるこころのケア

ワークショップ1:生きづらさを抱える人の農業作業を通じた社会参加～農福連携～

ワークショップ2:地域包括ケアシステムにおける入退院支援事業

ワークショップ3:乳幼児期からの発達障害児等への早期療育支援

ワークショップ4:卒業生のキャリアデザイン

総会

Webにて開催された総会には、45名の学会員が参加しました。議長には学部29期生 長戸和子氏が選出され、令和2年度の事業について、運営委員会活動、企画委員会活動、編集委員会活動、広報・渉外委員会活動、所属組織についての活動、会計決算、会計監査の結果が報告されました。審議事項として、令和3年度事業計画案について、企画委員会より第47回学会と公開講座4回の開催が、編集委員会より学会誌第47巻(1)(2)の発行が、広報・渉外委員会より広報活動の充実と、所属組織との連携が提案され、それに伴う予算案が提案されました。最後に、運営委員の改選案が提案され、いずれも承認されました。

看護開発研究会

看護開発研究会は、高知県立大学看護学部同窓会大学院部会の活動として、2015年度より毎年、高知女子大学看護学会の翌日に開催しています。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により開催できませんでしたが、本年度はZoomを活用したWeb開催として、7月18日(日)に『HOME COMING DAY』を、8月21日(土)に『看護開発研究会(演題発表)』を行いました。

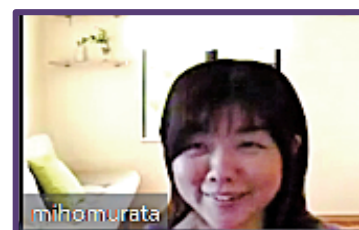
7月の『HOME COMING DAY』では、“やまも会”(博士後期・博士課程)修了生と在学生の皆様、先生方、計29名のご参加をいただき、対面が叶わない中でも、画面を通して交流を深めることができました。最初に同窓生を代表して中西純子氏(博士後期1期生)にご挨拶いただき、その後、参加者の皆様からお一人ずつ自己紹介と近況報告をしていただきました。それぞれに大学院で取り組んだ(取り組みたい)研究テーマ、今関心のあることや頑張っていることなどを時に熱くお話いただき、また“やまも会”の由来についても語られるなど、笑顔溢れる交流の場となりました。



さらに、博士後期課程の授業をご担当いただいている川口孝泰先生(医療創生大学 教授)、中山洋子先生(文京学院大学大学院 特任教授)のご参加も賜り、『次世代の研究者に期待すること、思うこと』をテーマにスピーチをいただきました。社会の発展や多様化が加速する時代の中で、看護が果たすべき役割や看護の発展に寄与する研究者としての視座について重要な示唆をいただき、改めて考える機会になりました。

8月の『看護開発研究会』では、博士前期・後期課程の修了生・在学生、先生方、計62名の参加を得て、『博士論文における研究方法の開発-研究上の困難や課題と工夫』のテーマで、3名の博士後期・博士課程修了生に、自身の経験を振り返りながら発表していただきました。

村田美穂氏(博士課程1期生)からは「質的研究における課題と工夫」として、放射線災害被災地域で生きる高齢者を対象とした現象学的研究に取り組んだ動機やプロセスをお話いただきました。語りの意味を問い続ける継続力、分析過程で見出される軸を大切に作る姿勢を教えてくださいととも、“インタビューは質の醍醐味”であるという熱いメッセージもいただきました。



金正貴美氏(博士後期課程11期生)からは「量的研究における課題と工夫」として、人間のComfortに焦点を当てた研究の過程をご発表いただき、取り上げた現象を表す概念の探求、そして、その概念を測る質問項目の作成プロセスを丁寧に踏んでいく重要性、数値で表される結果を読み解くためにも看護の現象にこだわり探求し続ける大切さなどを示していただきました。



升田茂章氏(博士後期課程17期生)からは「生理学的研究における課題と工夫」として、皮膚生理学的指標を用いた研究の過程についてご発表いただき、文献検討で明らかにされていることを正しく収集して“理解すること”の重要性、測定機器を慎重に選択する責任、「測ること」の看護としての意義への理解を得る努力を行う誠実性などを教えてくださいました。

発表後には、ご参加いただいた皆様方からご質問やご意見をいただくことで、看護者が行う研究の意義や価値を問い直し、研究者としての倫理的感受性を高めながら、実践に還元できる新たな知の創造に向かって歩む重要性和勇気を学ぶ意義ある場となりました。

次年度も多くの皆様のご参加をお待ちしております。

活躍する卒業生



後藤 志保さん(38期生)
がん研有明病院 がん看護専門看護師

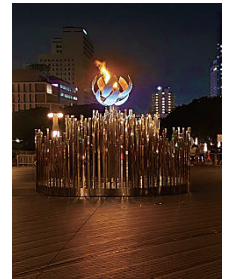
みなさん こんにちは。

私が勤務しているがん研有明病院は、東京臨海副都心にあり、この原稿を書いている今はちょうどオリンピックの真っ最中で、病院から歩いてすぐのところに、聖火台があります(仕事帰りに撮影してみました)。本来ですと、たくさんの人が会場を訪れ、大声援を送っていたことでしょう。2020年から続くコロナ禍は、オリンピックだけでなく、私たちの生活にも様々な影響を与えています。

当院はがんの専門病院ですが、20床の専用病棟でコロナ患者さんの受け入れも行っていきます。そんな中、コロナ感染に対する不安と自らのがん治療への不安を抱えたがん患者さんが毎日たくさん来院されています。外来通院中の患者さんたちはいつも以上に感染対策を徹底されていますし、入院中の患者さんにとっての大きな支えとなる家族の面会も制限されたなかで治療を続けています。全国どここの病院も同じような状況ではありますが、「コロナが心配でいつもの健診を延期したので・・・」「検査を延期したので発見が遅れたのでは・・・」といった受診の遅れや再発に対する患者さんの落胆や後悔、「家族みんなに会わせてあげたかった・・・」と緩和ケア病棟に入院中の患者さんのご家族の無念さに接すると、私たち医療者は何ができるのかとコロナ禍でのがん看護に悩みながらも取り組む毎日です。

私はCNSとして、放射線治療・画像診断センターで勤務しています。がん患者の高齢化が進む中、放射線治療を受ける患者数は増加しており、当院でも5台の治療装置で年間約1700件の治療を行っています。また画像診断センターでは年間5万件のCT検査を実施し、IVR(画像下治療)では、静脈ポート造設や肝動脈化学塞栓術はじめ様々ながん治療に対する支持的な処置を行っています。院内の放射線に関する検査、処置、治療が集約される部門において、専門性を活かし、患者さんへのケアや看護師に対する放射線に関する院内教育に携わっています。

COVID-19のウイルスも放射線もどちらも目に見えないものです。目に見えない脅威に患者さんだけでなく医療者も不安を抱くことがあると思います。不安などの気持ちも目に見えないですよね。目に見えないものを大切に、正しく向き合い、乗り越えていけるよう患者さん、医療者を支援していきたいと思っています。



笹山 睦美さん(修士14期生)
高知県・高知市病院企業団立 高知医療センターNICU 小児看護専門看護師

私は大学卒業後、GCUや小児科フロアで勤務し小児看護に携わる中で、たくさんのこどもたちやご家族に出会い、こどもたちの“育つ力”とご家族の“育む力”を支える看護を学びたいと考え、修士課程へと進学しました。修士課程修了直後は、NICU入院児等退院支援コーディネーターとして退院支援を主体に活動していましたが、現在はNICUに所属しており、自身の意思を言語化することが困難なこどもたちが出しているさまざまなサイン(ストレスサイン・安定化サイン)を丁寧に読み取りながら、急性期にあるこどもたちが必要としている治療が確実に提供されることに加えて、日々、成長し続けているこどもたちの成長発達を促すケアについて模索を続ける毎日を過ごしています。また、FCC(Family-Centered Care)の視点を基盤としながら、早産や疾患を持って誕生したことでNICUへの入院を余儀なくされているこどもたちが、家族の一員として迎え入れられる家族形成過程の支援にも取り組んでいます。

現在は、COVID-19の世界的な流行に伴う面会制限によって、家族がともに過ごす時間が極端に制限され、親子間の相互作用が促される体験を積み重ねながら関係性を構築していくことが困難な状況に晒されていますが、リモート面会等を活用しながら、ご家族がこどもたちの生きる力や育つ力を感じ取ることができるような支援を行っています。

そして、出生前診断によって、出産前からこどもが持っている疾患に向きあいながら、重大な意思決定を迫られるご家族への支援として、産前訪問の実施や産科フロアと協働して倫理的な視点を基盤としたケースカンファレンスを開催するなど、自身の所属しているフロア以外へ活動の場を拡充することにも取り組んでいます。

新生児看護領域は医療者優位のパターンリズムが生じやすい環境がありますが、定期的な倫理カンファレンスを継続していく中で倫理的感受性の醸成を図りながら、対等なパートナーシップを形成し、こどもたちとご家族にとって最善の利益を目指した看護ケアが提供されるようにフロア管理者、スタッフとともに日々、奮闘しながら、自身の能力向上に向けて、自己研鑽を続けています。



活躍する卒業生

池内 香さん(学部51期生 修士12期生) 医療法人須藤会土佐病院



高知女子大学看護学部を卒業して16年、高知女子大学大学院看護学研究科を修了して10年が経ちました。大学院修了後は6年間、母校で助教として勤務したのち、現在は高知県の医療法人須藤会土佐病院で勤務しています。土佐病院は高知県で唯一の精神科救急病棟を有する病院で、高知県精神科救急医療システムの中核病院としての役割を担っています。私は土佐病院に就職後、2019年に精神看護専門看護師の資格を取得し、精神科救急病棟に所属しています。救急病棟は精神科のなかでも入退院が多く、疾患群も多彩で、初発の患者さんに関わる機会もあります。専門看護師としてはまだまだ駆け出しですが、一人ひとりの患者さんやご家族と関わりながら、患者さんの背景を理解し、地域生活への移行・定着を目指して看護実践を行っています。入院中の支援だけでなく、退院後の継続支援として、電話訪問や外来での看護面談なども主治医と協働しながら行っており、ケアの連続性を意識した看護介入を行っています。

当院には、私を含めて高知県立大学(高知女子大学)大学院看護学研究科の修了生が3名在籍しており、教育委員会として活動しています。院内ラダーの作成や院内研修の開催などを行っています。教育委員会としては看護実践の基盤として、セルフケア理論の導入と定着が現在の大きな目標で、高知県立大学の先生方と研究を通して連携させていただいています。学部・修士を通して学んだ、理論としてのセルフケアの考え方を看護実践、現象のなかに落とし込んでいく作業はとても難しさを感じますが、同時におもしろさを感じるものでもあり、まさに理論と研究、実践の融合を肌で感じる日々です。教育委員会のメンバーが集まると、自然とディスカッションがはじまります。与えられたものをその通りに遂行するのではなく、いつも議論を交わしながら新しいものを創造していくスタイルは、我が母校で培った“力”だなと密かに感じています。

当院では高知県立大学の大学院CNSコース実践演習や看護学部の精神看護実習を受け入れています。他校からの実習生も受け入れています。やはり母校の実習指導には特別な思い入れがあります。自分自身が先生方(大先輩の皆様)から学んだ“知”を、実践のなかで“臨床”に落とし込み、後輩たちに“臨床知”として伝えていく力をこれからも培っていきたくと思っています。

瀧本 久美子さん(学部51期生 修士13期生) 山陰労災病院 在宅看護CNS

～患者・家族が望む場所での生活継続を支援したい～



高知県立大学看護学研究科を修了し、10年経過しました。私は急性期病院勤務経験だけで在宅看護CNSコースを専攻しました。今思えば、とても無謀なチャレンジだったと思います。

知識も経験もなく、講義についていくことは大変でしたが、高知県立大学は同期のつながりだけでなく、先輩・後輩との縦のつながりも強く、様々な方の支えがある温かい環境で、2年間充実した学生生活を送ることができました。大学院修了後は関西労災病院で退院調整看護師として勤務しました。在宅看護分野での経験がなく、3年間CNSの受験ができませんでした。同期が次々とCNSになるなか、焦る気持ちはありましたが、受験までの3年間は先輩CNSからのコンサルテーションを受け、CNSが臨床でどのように思考し、実践しているのか学ぶ時間となりました。CNSの6つの役割を意識し、意図的にリフレクションを行うよう心掛けていました。そして、大学院修了後4年目でようやくCNS資格を取得しました。

私が臨床の場に戻るころ、退院支援・退院調整に対し診療報酬が認められるようになっていました。地域の基幹病院には地域連携部門が設立され、退院支援を専門に行う看護師が配置されました。MSWが中心に行っていた退院支援を地域連携部門に配属された少人数の看護師も担う事になり、どのように連携部門を運営するのか試行錯誤していました。退院支援は病や障害を持ちながら生きなければならない患者・家族が、これまでの生活を再構築し、望む場所でその人らしい生活を継続できるよう支える重要な支援です。しかし、急性期病院では退院支援のゴールは退院であり、その先の生活を見据えた看護が提供できていない状態でした。そこで、退院後の生活を意識した退院支援をスタッフを巻き込みながら実施しました。また、退院支援システムを改変し、必要な患者に支援がもれなく提供できる仕組みを構築。そして、院内の教育体制整備、退院支援リンクナースの全病棟配置等、スタッフ同士で退院支援を教えあえる環境を整えました。2020年4月からは職場を出身地鳥取県に移し、山陰労災病院で勤務しています。在宅看護CNSとしてだけでなく、地域の連携窓口としてより広く活動できるよう看護師長補佐としての第一歩を踏み出したところ。院内だけでなく、地域と円滑な連携を推進していく要となるよう努力していきたくと思っています。

看護学部は今

ワクチン集団接種を実施しました

新型コロナワクチンの優先接種対象である“医療従事者等”枠に看護学生も含まれるという厚生労働省からの通知を受け、ワクチン接種の早期実現に向けて努力を重ね、高知県、そして高知医療センターの皆様との全面的なご協力により、6月30日、7月21日に池キャンパスでワクチン集団接種を実施しました。

ワクチンに関する様々な情報が錯綜していることを考慮し、学生には事前にワクチン接種に関する正しい知識や、相談窓口などの情報を提供しました。また、接種は自由意思で決めることを確認し、接種当日にも相談窓口を開設するなど、学生自身が主体的に健康管理を行えるよう支援しました。

接種までの準備、そして当日も高知医療センターの皆様には、予診やワクチン製剤の調剤、接種後の観察、体調変化者への対応、予診票の整理に、ご尽力いただきました。本学の事務職員は関係機関との調整や会場設営、受付や誘導など、そして医療資格をもつ教員や大学院生は調剤や接種、被接種者のサポートを担当し、一致団結して、ワクチン集団接種を安全に実施することができました。

ワクチン接種を終えられたことにより、学生そして地域の健康を守り、安全で安心な学習・実習ができる環境を整えていけると感じています。今回の集団接種は、かかわってくださった皆さまの協力を得て実現することができました。この場を借りて心からお礼申し上げます。



グローバルクラブ 代表 看護学部3年 曾木杏香

グローバルクラブは、昨年度立志社中に加わった新しい団体です。主に、高知県で暮らす外国人の困りごとや課題を一緒に解決していくことを目標に活動しています。今年度はコロナウイルスの影響でオンライン活動となりました。

今年度の活動テーマは「国際交流×SDGs」

昨年度までの活動で、在留外国人のごみの分別に関する地域課題があると知りました。この課題と、環境問題やSDGsについて学生が学ぶ機会を作りたいという思いからワークショップを企画しました。高知大の学生の協力も得て、高知大学と県立大学の2大学開催、総勢40名を超える学生に参加していただきました。

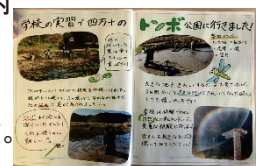
WSの中では、国際協力機構JICA海外青年協力隊として、実際に海外で環境教育の活動をされていた方々のご講演、留学生を交えた多国籍な意見交流、ごみ分別ゲーム等、学生の視野も広がったよい学びになりました。ごみ分別ゲームは、言葉の壁がある外国人の方にわかりやすく、楽しくごみ分別ができることを目的に学生が考えたものなので、コロナ収束後には地域の方々の交えた活動ができたらいいなと思っています。



学生サークルいけいけサロン活動

池キャンパスの地元の池地域で、サロン活動を中心に、地域の皆さんと交流をして、地域で楽しい時間を持つことを目指して活動して7年目を迎えています。活動が少しずつ定着してきたなかで、コロナ禍での活動となり、昨年度と今年度は非対面で、何とか活動を続けています。

昨年度は、地域のサロン参加者の皆さんと学生で郵送で行う交換日記をしました。初めての取り組みだったので、交換日記をイメージして貰えるようチラシを作成し、お伝えしていました。その結果、交換日記には、写真や折り紙を使った楽しい誌面が完成して、地域の方と学生互いの知らなかった一面をみることもできました。これはこれからの活動に生かすことができると思ったようです。また、令和2年度以降は、毎月のサロンのチラシに、学生がクイズや俳句、季節の料理等を掲載して、住民の方が自宅にいても少しホッとできるような誌面を心掛け作成して、町内会をとおして配布させていただいています。また敬老の日には、学生が自宅でそれぞれに地域の80歳以上の方にカードを作成して、郵送で町内会の方にお渡しし、地域行事にも参加させていただきました。早くマスクを外して交流が復活できるよう、心から願っています。



ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。
誠にありがとうございました。
(敬称略 令和3年9月10日現在)

陰山陽子様(18期生)
山田 薫様(26期生)
岩田禮子様(10期生)
佐藤美穂子様(19期生)
新谷ミサヲ様(15期生)
岡田溪子様(7期生)
西山純子様(33期生)
松井葉子様(27期生)
他 匿名希望4名

看護相談室

看護相談室は、12の専門領域が、高知県の保健・医療・福祉に従事する皆様方と共に、ケアの質を向上させることを目的としています。

家族看護学	* 長戸研究室 ☎ 088-847-8708 I. ケア検討会 未定 II. 交流会 未定 III. リカレント教育 5/21(金),6/18(金),7/16(金),10/15(金),11/19(金),12/17(金),1/21(金),2/18(金) 18:30~20:30
精神看護学	* 田井研究室 ☎ 088-847-8723 I. ケア検討会 6/20(日) 10:00~12:00・9/16(木) 19:00~21:00 12月・3月未定 II. 交流会 未定 III. リカレント教育 9月予定(西部地区研修会)
がん看護学	* 藤田研究室 ☎ 088-847-8704 I. ケア検討会 8/28(土) 2/11(金・祝) 13:00~15:00 II. 交流会 未定 III. リカレント教育 未定
クリティカルケア看護学	* 大川研究室 ☎ 088-847-8703 I. ケア検討会 6/5(土) 10/2(土) 13:30~15:30 II. 交流会 未定 III. リカレント教育 7/22(木)
慢性看護学	* 内田研究室 ☎ 088-847-8720 I. ケア検討会 11月頃(内容未定)
小児看護学	* 中野研究室 ☎ 088-847-8710 I. ケア検討会(大学院特別講義) 9月,11月,2月 *開催時期・内容は変更になる可能性があります。 IV. その他 赤ちゃん同窓会 10月頃
母性・助産看護学	* 渡邊研究室 ☎ 088-847-8719 I. ケア検討会 11/5(金)・2/18(金) 18:30~20:30 II. 交流会 8/3(火) 18:00~ III. リカレント教育 未定
地域看護学	* 時長研究室 ☎ 088-847-8715 I. ケア検討会 6/11(金),8/3(火),11/5(金),12/16(木) II. リカレント教育 6/18(金),7/29(木),12/14(火),2/10(木)
在宅看護学	* 森下研究室 ☎ 088-847-8709 I. ケア検討会 11/18(木)・2/17(木) 18:30~20:30 II. 交流会(Web・修士生対象) 9/24(金) 18:30~20:30
老人看護学	* 竹崎研究室 ☎ 088-847-8705 I. ケア検討会 11月・2月予定 II. 交流会 未定 III. リカレント教育 未定
看護管理学	* 久保田研究室 ☎ 088-847-8714 I. ケア検討会 6/18(金),10/8(金) 18:30~21:00 II. 交流会&III. リカレント教育 11/6(土) 14:00~16:30
災害・国際看護学	* 山田研究室 ☎ 088-847-8716 I. ケア検討会 6/24(木)・11/25(木) 18:30~20:30 II. 交流会 未定 III. リカレント教育 未定

看護学部・看護学研究科の活動

看護学部では、毎年、各専門領域ごとに卒業生、修了生、また地域の専門職者の方々との学びを共有する場として看護相談室を開催しています。

今年度の予定が決定しています。

ぜひ、ご参加ください。

高知県立大学のホームページにも詳細が記載されていますので、ご覧下さい。



寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。



編集後記

同窓会総会でお知らせしましたように、3期にわたって同窓会会長を務めていただきました梶原和歌会長様が今年度総会をもって交代されることになりました。10年間という長い間、同窓会の活動にご尽力いただき、深く感謝しております。

依然として新型コロナウイルスの感染が落ち着かない状況が続いております。同窓生の皆様とお会いできる懇親会が中止となり、残念ですが、必ず懇親会で皆様にお会いできますことを楽しみにしております。会報を通して同窓会のネットワークを強め、助け強めていきたいと思っております。ご協力どうぞよろしくお願いいたします。

表紙：工石山白鷺岩からの四国連山
池添・川本・西内

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部
Fax:088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
<http://www.u-kochi.ac.jp/>
高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>

